

## ブルガダ三兄弟の 心電図リーディング・メソッド 82

野上昭彦, 小林義典, 鵜野起久也, 蜂谷 仁 訳  
Josep Brugada, Pedro Brugada, Ramon Brugada 著

＜書評者＞ 相澤義房（新潟大名誉教授/  
立川メディカルセンター研究開発部部长）

『ブルガダ三兄弟の心電図リーディング・メソッド 82』（原書“*Our Most Beloved Electrocardiograms*”）が翻訳され、医学書院から上梓された。原著者は、あの高名なブルガダ三兄弟で、突然死蘇生例の中から特徴的な心電図所見を示す 8 例を報告し、これが今日 Brugada 症候群として知られるようになった。これは 1992 年の出来事であり、20 年を経てその業績を称え、2012 年のヨーロッパ心臓病学会（ESC）で表彰されている。以前、Pedro Brugada 教授が Brugada 症候群、私が J 波関連特発性心室細動、そして Silvia Priori 教授が遺伝性不整脈と、ウィーンの ESC でシンポジウムの機会を作っていただいたのも 10 年以上昔の懐かしい思い出である。三兄弟の中で、とりわけ長男の P. Brugada 教授はユーモアにあふれ、クリスマスカードならぬクリスマスメールを送ってくれるが、

これが節約なのかエコなのかといった物議をかもしたりしている。

さて、本書の内容であるが、全体で 82 題の心電図（不整脈）を取り扱っている。おのおの、不整脈の名前ではなくユーモアを含んだしかも本質的なタイトルが付けられている。そしてその解説（回答）は簡潔に、キーポイントを挙げるといって形をとっている。取り上げられた不整脈は誰もが目にするはずのもので、決して稀なものに限ったり、奇をてらったものではない。ある程度ありふれた不整脈でありながらも、随所にさすが三兄弟と言うべき心電図診断における心がけが見てとれる気がする。

1 題 1 題がわかるには、心電図と不整脈の基本の理解が要求される。しかしこれらを身につけていれば、正しく解釈できると思われる。その意味で、読者は心電図、

不整脈の実力がどれほど身についているかの自己判定ができるし、本文に指摘されたポイントであやふやなことがあれば、それを自ら教科書などで確認することで自分の力を伸ばすこともできる。したがって、本書は初心者向きというより、“世の中に通用するには、これだけの心電図と不整脈の理解が必要である”といった、いわば玄人向けの教科書ともいえる。

訳者はわが国の中堅の実力者による。心電図の解釈がブルガダ兄弟の解釈でよいかどうかを慎重に吟味しながら、訳に当たったのではないかと想像している。不整脈専門医がわが国で確立されつつあるが、そこで要求されるレベルは本書を読み解くことができる、あるいはここでの解釈を理解し共有できるということであるかもしれない。

おのおのの心電図は彼の友人である不整脈学者に捧げられているが、その意図もまた捧げられた人の反応も、ここでは知ることはできない。

●B5 横判 頁 232 2012 年  
定価 4,725 円  
(本体 4,500 円＋税 5%)  
[ISBN978-4-260-01544-8]  
医学書院 刊